

国語

注意

1. 問題は全部で15ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
---	----------------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

一 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

二〇一六年五月、サンフランシスコ現代美術館に突如として現れた作品が世間を騒がせた。その作品はメガネの形状をとり、床の上に無造作に配置されていた。メガネはふつうの大きさで、奇抜なデザインや色をしているわけではない。一見するとなんの変哲もないメガネなのだ。人びとはなんとか作品の意味を理解しようと説明書きに目を凝らしたり、美しさを感じようと床に這いつくばって眺めたり、最良の角度から写真に収めようとしたりしていたことを、ガーディアン紙やニューヨークタイムズ紙をはじめとする多くのメディアが伝えた。

ではこの「メガネ」¹は、いかなる意味で芸術だったのだろうか。鑑賞者を悩ませたのもそのはず、それはじつは、美術館を訪れた二人の若者によるイタズラだったのだ。彼らは、美術館についての説明書きの近くに勝手にメガネを置き、人びとが夢中になり、それがあたかも価値と意味をもった一流の芸術作品かのように仕立てあげられていく様子をSNSに投稿し、芸術とは何かを問うたのだ。

このエピソードを、おそらく多くの人は簡単に笑えないだろう。私たちは美術館へ行くと、そこにあるモノこそが、美しい芸術だと自動的に想定する。一つひとつの作品の前で立ち止まり、静かにじっと作品を見つめて過ごす。作品の前ではものを食べたり、大声を出したり、作品を触ったりすることは自然と(あるいは強制的に)避けられ、私たちの知覚は次第に視覚へと特化され、鑑賞のモードへと切り換わる。そして私たちはじっと作品を見つめつけ、その美しさが自分を圧倒し、のみこんでくれる偉大な瞬間を待つのである。「メガネ」も美術館のなかに陳列されているからにはきつとそのような作品としての美的価値もっているはずであり、もしもその美しさがわからないのなら、それは自分の落ち度である、なんとかしてそれを感じとらねばならない、そう多くの人が思ったことだろう。

だが、はたしてそうだろうか。芸術の本質とは美しさにあるのだろうか。文化人類学は長きにわたって「芸術のようなモノ」²を研究対象としてきた。だが、仮面や布、神像や器、装飾品などといったモノは、生活のざわつきを全身にまとう、使用価値にま

みれた工芸クラフトであつて、ほんものの芸術アートではないとされてきた。そして、それらは美術館ではなく博物館に並べられるのがよいとされ、制度的に芸術と分けられてきたのだつた。他方で、そこに見出される美としか呼べそうにないなにかは、人類学者のみならず、芸術家もふくむ多くの人びとをミリオウシ、さまざまな思考を促してきた。

⁴ 芸術の歴史は美の歴史と切つても切り離せない関係にある。西洋芸術の鑑賞態度とは、美しさを判断する態度であるべきで、たとえば「これは使えるか使えないか」といった実用性にもとづく判断を芸術に用いるのは不適切とされてきた。逆にいえば、美しさ以外の価値に重きがおかれる工芸のような生活品は、芸術とは一線を画すべきだという見方があつた。

だが文化人類学的にみるならば、芸術と工芸の境界は自明ではない。たとえばアート(Art)の語源であるラテン語のアルス(ars)とは、もともと形成における技術を意味していたが、近代ヨーロッパの文化のなかで作者の個性が重視されるようになると、小文字のアート(art)から職人的技術を排除したところの、大文字単数で考えられるような特権的なアート(Art)になつていった。さらに、元来のつながりを取り戻すかのように一九世紀末のイギリスで起つた美術工芸運動や、二〇世紀初頭の日本で起つた民芸運動にみられるように、とりわけ近代以降の視覚芸術は、その領域を工芸へと拡大させていった過程ぬきでは理解できない。二〇世紀美術の代表であるキュビズムやシュルレアリスムが、アフリカ、オセアニア、北米各地の工芸から直接的な影響を受けたことはよく知られており、これらの収集には多くの文化人類学者がかかわつていた。

足並みをそろえるように芸術研究でも、芸術には美という本質がある(なにが芸術か)という見方から、芸術は制度によつて芸術になる(いつ芸術になるか)という構造的な見方へのシフトが生じた。あるモノが芸術になるのは、芸術として位置づけられる歴史や理論の雰囲気、すなわち「アートワールド」にそれが参入するからであり、芸術家、批評家、収集家、美術館、博物館などから構成される「制度」によつて芸術と認知されるからなのだ。先述の「メガネ」は、まさにこのような制度のなかで芸術となつていった好例といえる。つまり、実用目的で着用しているメガネ自体は芸術ではないが、それをいったん美術館に並べることによって成功し、作品としての意味を歴史や理論のつとつて説明し、人びとをまきこむことができたのなら、まったく同じそのメガネは芸術としての「メガネ」になるのである。

ただし文化人類学にとって制度とは、糾弾すべき対象でもあった。たとえばジェイムズ・クリフォードは、非西洋地域の工芸が芸術の舞台へと参入するのを可能にした植民地的制度を指摘する。彼はとりわけ、収集・分類という作業をおして、異国情緒の漂うモノをコンテクスト化し、あらたな価値を付与していった制度的かつイデオロギー的なシステムを「芸術Ⅱ文化システム」と呼び、それを可能にした非対称的な権力関係を批判した。

制度論的説明は、現代の芸術風景に対する一定の説明を与えてくれるし、植民地主義批判という重要な論点を提起した。だがそれは、「芸術(のようなモノ)」の価値のすべてを示すことはできない。たとえば、どんなモノでも **A** には制度によって芸術になりうるとしても、私たちは特定の「芸術(のようなモノ)」を前にしたときに生じるゾクゾクした感じや、うっとりとした感じを知っている。それを「アートワールドが制度化した感覚」と言ってしまうのでは、なにか物足りない。では私たちはその感じを、いったいどう理解すればよいのだろうか。

そもそも、モノに関する人類学は物質文化研究によって牽引されてきた。⁶「物質文化」とは、人間が文化的な活動をおして生み出したすべてのモノをさし、装飾品や宗教的彫像などはもちろん、釣具や鍋といった生活用品もふくむ。物質文化研究はもともと、未開社会から新奇なモノを収集するという植民地的プロジェクトと手をたずさえながら、一九世紀ごろより西ヨーロッパを中心に発展した。初期の研究において物質文化は、それを生み出す技術や社会がどれだけ洗練されているかを測定する指標とみなされた。とりわけ人類学、考古学、博物学が協力することで、たとえば化石から進化の段階を決定することができるように、社会の発展の度合いは、そこにある物質文化から読み取ることができるのだとされ、大量のモノが収集され、諸文化が分類された。この収集・分類という作業をおして、非西洋地域の諸社会は、ヨーロッパ・ヴィクトリア朝式の社会を頂点とするような単線の発展図式の内へと振り分けられていったのだ。この成果が現在の博物館の土台ともなった。

このような **B** な見方は次第に退けられていったが、一連の研究が開拓した技術論自体は、考古学や人類学を横断した物質文化研究の基盤となった。物質文化研究とときに重なりながらも、あえて芸術という概念を背負いつづけた研究の多くは、 **C** という、文化相対主義的な姿勢をとった。そして、西ヨーロッパとは異なる歴史的・文化的背景をもつモノの

独自の文脈に着目し、それらの意味や価値を考察してきた。そこから形成されたのが、芸術(審美性)と工芸(実用性)は切り分けられないという、現在にも通ずる文化人類学的な芸術観である。

文化人類学では、諸文化に息づく多様なモノを「○○芸術」として相対化するなかから、芸術自体を再定義することをつうじて、工芸と芸術との接合を試みてきた。ここにみられるのは、さまざまな文化において「私たち」と「彼ら」双方にとつて美的と呼べるような判断が存在する一方で、その判断は美術館で私たちがやっているように独立しているわけではないという考え方だ。

たとえばトロブリАнд諸島のクラ交換に用いられるカヌーはタクエツ⁷した彫りや彩色で知られ、どんな美術館に並べても引けをとらないような視覚的特徴をもつ。そしてこの視覚的特徴こそがクラ交換の相手に返礼をさせる力の一端を担うともいわれる。だが、それが現に美術館のガラスケースに入れられたなら、おそらく発揮される力はずいぶん異なるたぐいのものになるだろう。それは青い海とのコントラストのなかに浮き上がった赤と白として、ぐんぐん島へと迫ってくるから人びとをぎよつとさせるのであり、巧みな技術を見て人びとは「こんなものを作り出すなんて、彼らはいったいどんな凄い呪術力をもっているのだろう」と畏れる。カヌーはこのようなさまざまな事象と一体となつてこそ大きな力を発揮するのだ。

では芸術と芸術のようなモノをつなぎながら思考する方法とはどのようなものだろうか。文化人類学からのひとつの答えは、芸術だけでなくあらゆる領域で用いられてきた比較という思考方法によつて与えられる。「芸術だ」ではなく、「芸術ではない」でもなく、「芸術のようなモノ」という「あいだ」において、私たちは芸術の意味内容を画定する必要のないままに、さまざまな一見関係のないモノを比較し、関連づけることができるようになる。たとえば、パブロ・ピカソの《ゲルニカ》を芸術の典型だと思ふ人が、トロブリАнд諸島のクラ交換用カヌーを見て「芸術のようだ」というとき、ピカソの《ゲルニカ》とカヌーは芸術という概念を介して比較され、関連づけられる。そして芸術の概念は、関連づけられたあらたなモノを取りこみながら、その意味内容を拡張していく。あたらしい意味や価値を生産していくことが、芸術という領域の担ってきた機能であるならば、このような文化人類学の比較という思考方法こそ、まさに芸術そのものといふことでもできるだろう。

さらなる答えは、アルフレッド・ジュエルの研究に見いだせる。ジュエルは手垢⁸のついた芸術概念からいったん距離をとつて、人

類学的な知を基盤とする芸術理論を根本から構想しなおした。彼はまず、芸術の人類学がまだ美という神話に囚われていることを指摘し、美という領域を想定せずに芸術を理解する方法の必要を説いた。ジェルが拒否するのは、芸術作品は美や象徴を運ぶ、それ自体は何ものでもないような箱であり、読み解かれるべきは中身(美)だといった、従来の二元論的見方だ。そうではなくて、箱と中身はそもそも分けられず、作品とは何かの類像イコノでもなく、象徴でもなく、指標インデックスなのだと言おう。

いずれにせよ、芸術作品は、何が何と行為しあったのかというネクサス(関連づけ)をつくりだし、引きつづく行為を方向づけるが、このネクサスの発生こそが、芸術作品の働きによる社会的効果である。ジェルはこのようにして、芸術作品とは美の表現ではなく、人間の社会的行為を媒介し方向づける形態であるとし、その特殊性は、世界に変化を引き起こそうとするあらゆる参与者の意図や、芸術作品の生産・分配をつうじてそれを達成するプロセス、そしてその社会的諸効果にあると論じた。このような見方をするとき、私たちは芸術を、あらたな関連づけの方法へと誘いこむような「世界を変えることを意図した行為の体系」として理解し、その過程を、美というブラックボックスを経由せずして、文化や社会のうちに見渡せるようになるのである。

(渡辺文「モノと芸術」による)

[注]

*「○○芸術」…たとえば、フランツ・ボアズの「未開芸術」や木村重信の「民族芸術」など。

*クラ交換…ニューギニアの贈与交換制度。儀礼的な贈り物の交換であり、諸地域間に連帯と協力の関係を維持するためとしての意味がある。

問一 傍線部1「メガネ」についての説明として、本文の内容に即して最適なものを①～⑤から選び、記号をマークせよ。解

答欄番号は 1

- ① サンフランシスコ現代美術館は、人々の芸術への認識を調べるために、めがねを陳列して反応を見た。
- ② 一見ただの実用品であるめがねであっても、美術館に陳列され、人々をまきこむことで芸術作品となりうる。
- ③ あたかも作品のように陳列されたが、このめがねは美的価値がなかったため芸術と認められなかった。
- ④ めがねは元来芸術品として価値が認められなかった実用品だったが、ある二人の若者の実験をきっかけに芸術品に含まれるようになった。
- ⑤ 美術館に陳列されためがねに多くの人は美的感動を得ることができた。

問二 傍線部2「芸術のようなモノ」とあるが、なぜ「芸術」ではなく、「芸術のようなモノ」としているのか。その理由として、

本文の内容に即して最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 2

- ① 筆者が、芸術が何なのかを読者に考えさせるため、あえて芸術の意味内容を限定しなかったため。
- ② 文化人類学では、審美性と実用性を切り離さない芸術観を持ち、また、芸術の対象を限定せずに、その概念を再定義しながら芸術研究が行われてきたため。
- ③ 文化人類学では、使用価値にまみれた工芸品こそが本物の芸術だとみなしているため。
- ④ 文化人類学では、芸術と工芸について制度的な区分をしてきたため。
- ⑤ 文化人類学では、工芸品のなかから美的価値のあるモノを芸術としているため。

問三 傍線部3「ミリオウ」を漢字で記せ。解答用紙(その2)を使用。

問四 傍線部4「芸術の歴史は美の歴史と切っても切り離せない関係にある」とはどういう意味か。その説明として本文の内容に

即して最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 3

① 芸術家は、美的価値のみを念頭において作品を創作してきた。

② 芸術研究は美学研究とともに発展してきた。

③ 芸術作品を評価する際、常に美的価値が基準となってきた。

④ 西洋芸術の鑑賞態度は、実用性だけでなく、美しさを判断する態度でもあるべきだとされてきた。

⑤ イギリスで起こった美術工芸運動や、日本で起こった民芸運動も、美的価値を基準として工芸品を芸術に含めた。

問五 傍線部5「文化人類学にとって制度とは、糾弾すべき対象でもあった」のはなぜか。その説明として本文の内容に即して最

適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 4

① かつて西洋の列強が植民地の工芸を収集、分類作業を通して新たな価値を付与することで芸術へと組みこんだため。

② 制度によって、めがねのような実用品までもが芸術とみなされたため。

③ 美術館、博物館という制度によって、芸術の概念が歪曲されたため。

④ 文化人類学では、芸術研究の、芸術は制度によって芸術になるという構築的な見方に批判的なため。

⑤ 文化人類学では、植民地政策そのものに批判的なため。

問六 空欄

A

には、「外からは見えない状態で存在するさま」という意味の言葉が入る。その言葉として、最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は

5

① 体系的

② 暫定的

③ 確定的

④ 断片的

⑤ 潜在的

問七 傍線部6「物質文化」についての説明として、本文の内容に即して最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせ

よ。解答欄番号は

6

① 物質文化は、人間が文化的な活動をとおして生み出すモノをさすが、生活用品は含まない。

② 物質文化研究は、植民地におけるモノを収集するプロジェクトが基盤となって進展した。

③ 人類学・考古学・博物学では、社会発展の度合いを物質文化から推察することはできないとされてきた。

④ 物質文化研究において植民地におけるモノの収集は装飾品や宗教的彫像がメインであった。

⑤ 物質文化研究では、物質文化はそれを生み出す技術や社会の洗練度を測定する指標であるという見解が現在においても

支配的である。

問八 空欄 B に入れる言葉として、最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 7

- ① 機能主義的
- ② 相対主義的
- ③ 構造主義的
- ④ ポスト構造主義
- ⑤ 進化主義的

問九 空欄 C に入れる文として、最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 8

- ① それぞれの地にはそれぞれの芸術(文化)がある
- ② 自分の属している集団の文化を基準として他の文化を評価する
- ③ 芸術に政治、哲学、宗教など他の文化領域の介入をゆるさない
- ④ 文化には普遍的な原理があり、いずれの文化においてもその普遍的なものを重視するべきである
- ⑤ 文化は、客観的もしくは物理的に存在しているのではなく、人々の認識によって社会的に構築されていると考える

問十 傍線部7「タクエツ」を漢字で記せ。解答用紙(その2)を使用。

問十一 傍線部8「手垢のついた芸術概念」が意味するものとして、本文の内容に即して最適なものを、次の①～⑤から選び、記

号をマークせよ。解答欄番号は 9

- ① 制度によって、工芸も芸術になりえるという芸術観
- ② 芸術と工芸は切り離せないという文化人類学的芸術観
- ③ 人類学者が植民地から収集・分類したモノは芸術に含まれるという芸術観
- ④ 芸術には美という本質があるという芸術観
- ⑤ 芸術作品は美の表現ではなく、人間の社会的行為を媒介し方向づける形態であるという芸術観

問十二 本文の内容と合致するものを次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 10

- ① 芸術作品についての制度論的説明は、「芸術(のようなモノ)」の価値をすべて示すことができる。
- ② 芸術研究では、芸術について、構築主義的な見方から本質主義的な見方へとシフトした。
- ③ 文化人類学では、芸術作品を、美を基準としてではなく、社会的コンテクストにおいて果たす作用を評価する見方を試みる研究が行われている。
- ④ イギリスの美術工芸運動や日本の民芸運動は、キュビズムやシュルレアリスム台頭のきっかけとなった。
- ⑤ パブロ・ピカソの《ゲルニカ》とカヌーを、芸術という概念を介して比較・関連づけることで、価値の違いを明らかにすることができる。

二 次の文章は、ある者の間に「翁」が答えるという形で構成されている。これを読んで後の間に答えよ。

ある者問ふ、『老子』に、「道の道とすべきは常道にあらず」云々とあるは、如何なる意ぞ。

翁曰はく、老子の「常」と言へるは、天然自然、¹ 万古不易のものをさしていへるなり。聖人の道は、人道を元とす。それ人道は、自然に基づくといへども、自然とは異なるものなり。² 如何となれば、人は米麦を食とす。米麦自然にあらず、田畑に作らざればなきものなり。その田畑といふもの、また自然にあらず、人の開拓によりてできたものなり。その田を開拓するや、堤を築き、川を堰き、溝を掘り、水を上げ、畦を立てて、はじめて水田成る。もと自然に基づくといへども、自然にあらずして、人作なること明らかなり。

すべて人道はかくのごときものなり。³ 故に法律を立て、規則を定め、礼樂といひ刑政といひ、格といひ式といふがごとき煩はしき道具を並べ立てて、国家の安寧はやうやく成るものなり。これ、米を食はんがために、堤を築き堰を張り、溝を掘り畦を立てて、田を開くに同じ。是を聖人の道と尊むは、⁴ 米を食はむと欲する米食仲間の人のことなり。

老子これを見て、「道の道とすべきは常の道にあらず」といへるは、「川の川とすべきは常の川にあらず」といふに同じ。「それ堤を築き堰を張り、水門を立てて引きたる川は、人作の川にして、自然の常の川にあらず」Aと、天然自然の理をいへるなり。理は理なりといへども、人道とは大いに異なり。人道は、この川は堤を築き、堰を張りて引きたる川なれば、⁵ 年々歳々フシン手入れをして、大洪水ありとも破損のなきやうにと力を尽くし、もし流失したる時は速やかに再興して、もとのごとく早く修理せよといふを人道とす。「もと築きたる堤なれば崩るるはず、開きたる田なれば荒るるはず」といふは、⁶ いはずとも知れたることなり。

⁷ 彼は自然を道とすれば、それを悪しといふにはあらねど、人道には大害あり。とうてい老子の道は、「人は生まれたるものなり。死するは当たり前のことなり。これをなげくは愚なり」といへるが如し。人道はそれと異なり、他人の死を聞きても、「さて気の毒のことなり」となげくを道とす。いはんや、親子・兄弟・親戚におけるをや。これらの理をもつて、おして知るべきな

り。

〔二宮翁夜話〕による

〔注〕

*『老子』…中国古代の思想家で道家の祖とされる老子の著作と伝えられる書物。

*「道の道とすべきは常道にあらず」…『老子』の冒頭にある言葉。世の人が一般に守るべき道だと考えているものは、恒常不變の道ではないという意味。

*聖人の道…儒教のこと。

*礼楽…礼儀と音楽。古代中国の儒家によって尊重された。

*刑政…刑罰と政治。

問一 傍線部1「万古不易」の音読みをひらがなで記せ。解答用紙その(2)を使用。

問二 傍線部1「万古不易」とはどういう意味か。最適なもの次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 11。

- ① 古くさいならわしのこと
- ② どこにでもある平凡なこと
- ③ いつまでも変わらないこと
- ④ すぐにはわからない本質的なこと
- ⑤ 古くからあるのでわかりやすいこと

問三 傍線部2「如何となれば」とは、どういう意味か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は

12。

- ① それを疑問に思うわけは
- ② それを不思議に思うのならば
- ③ それをどうしたらよいかということ
- ④ それはどうしてかということ
- ⑤ それは何になったかといえは

問四 傍線部3「かくのごときものなり」とは、どういう意味か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄

番号は 13。

- ① 自然の道を尊重しながらも、そこから新たな法則を見いだしてゆくものである
- ② 自然な存在のように見えて、実は偽りを含んだ生き方をしてしまうものである
- ③ 自然を基盤としてはいるが、人間の手を加えることよって作られているものである
- ④ 自然の恵みを受けているにもかかわらず、それを知らず知らずのうちに破壊してしまっているものである
- ⑤ もともと自然な考え方をしていたはずだが、いつの間にか人間本位の考え方におちいつてしまっているものである

問五 傍線部4「米を食はむと欲する米食仲間の人のことなり」とは、どういう意味か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **14**。

- ① 米を食いたいと願う我々人間の考えることである
- ② 米を常食とする豊かな人々だけが抱く通念である
- ③ 米をふだん食えない貧しい人々の持つ信仰である
- ④ 米を食う習慣を持った人々が仲間うちで作った決まりである
- ⑤ 米を食いたいという欲望に支配された一部の人間のしわざである

問六 空欄

A

に入れる文として、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **15**。

- ① 大雨の時にいできたるべきなり
- ② 大雨の時にいできたりし川なり
- ③ 大雨の時も破れざるものなり
- ④ 大雨の時を考へざるものなり
- ⑤ 大雨の時は皆破るる川なり

問七

傍線部5「フシン」を漢字に直した場合、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **16**。

- ① 不審
- ② 不信
- ③ 腐身
- ④ 普請
- ⑤ 浮心

問八 傍線部6「いはずとも知れたることなり」とは、どういう意味か。最適なものをお次の①～⑤から選り、記号をマークせよ。

解答欄番号は 17。

- ① わざわざ言わなくとも、皆が尊重している真理である
- ② あたりまえであつて、言つても意味がないことである
- ③ ことさら言う必要もなく、秘しておくべきことである
- ④ 言われなくとも、真の知識人は理解していることである
- ⑤ 老子にとっては、言葉にする以前からわかつていたことである

問九 傍線部7「彼は自然を道とすれば、それを悪しといふにはあらねど」とは、どういう意味か。最適なものをお次の①～⑤から選り、記号をマークせよ。解答欄番号は 18。

- ① 老子は自然というものを根本に置く考え方をしているわけで、それが悪いというわけではないが
- ② 老子が自然の法則を道理と考へている可能性は考へられ、その可能性を否定しているのではないが
- ③ 聖人たちは、自然に生きることを最重要と考へたのかもしれない、それがまちがっているとはいえないが
- ④ 聖人たちの道というものは、自然そのものによつて立つのかもしれないし、そのこと自体を批判するつもりはないが
- ⑤ 老子が聖人らしい考へ方を身につけたのは自然ななりゆきだったので、その善し悪しを論じてもしかたのないことだが

問十 この文章の内容に合っているものを、次の①～⑤から一つ選り、記号をマークせよ。解答欄番号は 19。

- ① 人間が国家を保つために法律や規則を定めるのは、自然の営みの一種であるとも言える。
- ② 人間は自然に手を加えて生きているので、自然を原理とする考へ方だけではやつていけない。
- ③ 老子は自然を尊重するあまり、農耕に必要な土木工事さえも否定したが、それは誤りである。
- ④ 人間の都合で川を加工する場合には、本来の自然な川のあり方を入念に検討する必要がある。
- ⑤ 老子の説いた理は、人の道を外れてしまう面があるので、永遠に変わらない真理であるとは言えない。



